

〈研究余滴〉佐賀方言の「動作進行態」と「状態継続態」

江口, 泰生
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10436>

出版情報 : 文献探究. 19, pp.20-54, 1987-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

へよれば・うしろから。／＼(八百やお七)、三一九〇)

底本などの七行本以外は、「によつと」がないとのことであるが、やはり「拍足らず」となり不可である。

／＼でも御合点・ないならば／無理に吉三を・引出そと／太左と身共・兩人が／しめし合て・置ました。／(八百やお七)、三一九〇) 該当部分、八、九行本は「そ」に濁点があるとのこと。底本は「ヒキダソト」、八、九行本は「ヒキダソト」となり、前者がよりよく韻律をみたしている。意味の上からも問題ない。

十

以上、韻律の観点から、紀海音の用語意識を縷々述べてきた。内容を欲張ったため、個々の事象の分析がおおざっぱなものとなったことを遺憾とする。それらの中には、活用の型変化の問題など、独立の論文としてなお詳しく分析すべきものも少なくない。いずれ稿をととのえる機会を得たいとおもう。また、用例に遺漏のすくなからぬことを恐れる。

本稿では、浄瑠璃作者の代表格としての近松の用語については、意識的に言及するのを避けた。先の小文でも述べたが、近松は浄瑠璃詞章の韻律性に囚われすぎる作者を難じている(稿者には海音をゆびさしているとはか考えられない)が、通読したところでは、やはり韻律に対するこまかな配慮があちこちに見受けられる。時には海音とまったくおなじ方針でのぞんだと思われる用語もあるようである。これもまた、後の機会に分析してみたくおもう。

一完一

宮崎大学教育学部講師

◎研究 余瀟

佐賀方言の「動作進行態」と「状態継続態」

江口泰生

西日本の大部分でそうである様に、佐賀方言でも「動作進行態」と「状態継続態」を区別する。

小野志真男氏の佐賀方言の区画(例えば、『九州地方の方言』所収「佐賀県の方言」国書刊行会 昭和五十八年三月)によれば、「動作進行態」は、佐賀東部地区(三養基郡・神崎郡・佐賀郡・佐賀市・小城郡)等では「カキヨツ」・「フイヨツ」、佐賀西部地区(多久市・杵島郡・武雄市・伊万里市・西松浦郡・藤津郡・鹿島市・太良町)では「カキラー」・「フイラー」、一方、「状態継続態」は、佐賀東部・西部共に「タットツ」・「タットー」(立っている)という分布を示すという。

つまり、「動作進行態」と「状態継続態」が、佐賀東部では、「オル」・「トル」の対立であるが、佐賀西部では「オル」・「トル」の対立で示されるという事になる。「動作進行態」の形態的な相違が存するという事である。

佐賀東部と佐賀西部の「動作進行態」の違いは、単に形態的な違いであり、文法的な意味はないのであるが、この形態的な違いが方言区画の一つの指標として用いられているとすれば、この対立が生じた原因を考えてみる事も決して無意味ではないと言えるであろう。はたしてこの様な形態的な違いは何によって生じたものであろうか。

蒲原大蔵の「伊勢道中不案内記」(天保元年に初編、嘉永末までに完結)は、佐賀の戯作文学の中で最も大なる作品である。しかも佐賀方言を大量に収録している事によって、江戸時代末期の佐賀方言を知るうえで、貴重な方言資料と言える。しかしながら、公刊された活字本(肥前史談会古書刊行部 昭和三年十二月)が、研究上のテキストとしては必ずしも良いものでなかったため、これまで、佐賀の戯作文学の作品を材料にして、幕末期の佐賀方言について論文を発表し続けてきた篠崎久躬氏

- (31) 477上 「詩学序説」
- (32) 444上 「詩人の手帖」
- (34) 448上 「」
- (35) 444下 「詩話」
- (36) 370上 「」
- (37) 引用は江藤淳『小林秀雄』(尚川文庫)に拠った。
- (38) 根岸泰子『小林秀雄とその時代』(『一冊の謠筆小林秀雄』昭59・8有精堂)
- (40) 根岸泰子『小林秀雄における「詩」と「小説」——言語認識という視点から——』(『国語と国文学』昭56・12)
- (41) 「『文学は絵空ごとか』の中で小説と喫煙の象徴に就いての言及があるが、これはチポード『小説の読者』の一節に見出せるものであり、『小説の読者』と『ロマネスクの心理』とは『L'Œuvre de Romains』(1925)中に併収されている。小林はこれを讀んだものと見られる。
- (42) 全て『小説の美学』(昭42・10人文書院)に拠る。
- (43) 堀口大智訳『トルゲル伯の舞踏会』が出たのが昭和六年(白水社)である。恐らくこれが初めての全訳であろう。この部分を入からくり✓と訳したのは、従って渡辺のこれが最初という事になるか。小林の入からくり✓との直接的関連も考えられてよいかも知れない。

〔付記〕 引用は特に注記していない場合のみ新訂版全集に拠った。引用に際して仮名遣いはその儘に、旧字体は新字体に改めた。なお引用文中の傍点その他の符号は全て原文の儘である。

一九八七・一・二九編
九州文学大学院博士課程

(20ページより続く)

も、『伊勢道中不案内記』に対しては慎重な態度を示され、これを資料として扱わない場合が多いのであった。しかし、活字本の資料的な欠を補う事が出来るならば、『伊勢道中不案内記』は蒲原大蔵の代表作であるだけに、その質・量共に佐賀方言の史的研究所の資料として貴重である事は繰り返すまでもない。

そこで、活字本の他に野中家写本(佐賀県立図書館マイクロ・フィルムによる。分類番号C1123/マイクロ番号55-5-123)を利用してその資料性としての欠の一部を補い、以下、幕末期の佐賀方言の「動作進行態」と「状態継続態」について述べようと思う。野中家写本によって活字本の資料的な欠の一部を補い、一方が一方の低位の系統に属する本ではない事、②従って、両者に共通の部分は比較的古い形態を保存していると判断出来る事、による(以下、用例を引く時は、先ず、活字本のページによって示す。野中家本は、仮名を現行の字体に改める以外は、原本のままである。但し、印字の都合上、捨仮名の類の位置がずれる場合がある)。

さて、先ず「状態継続態」の方から述べる。

「銀作」が下に顔を向ける事も出来ない程に髪をきつく結われ、乗合船に戻って言ったセリフ、

183さうして道に三徳の落ちてあつたれど拾ふ事もならぬぢやないか、あつたら事アした、金どももいつとらうだア(そふして道に三徳の落ておつたひどん拾ふ事もならぬぢやアなつこふおしい事をした金どももいつとつとろふだア)

頭を刺られた「愚津郎兵衛」が乗合船の中で場所を占めすぎる事に腹を立て、自分の主人と分らずに「久米蔵」が「愚津郎兵衛」に言ったセリフ、

185お前さんばつかり借りた船ぢやござらぬばん、わたしどもみんな銭だしとりまつするばん(お前さん計りかつた船ぢやアござらぬわたしどもみんな銭たアとりまつするばん)

(20ページより続く)

はぐれた「重八」を氣遣つて「久米蔵」が言つたセリ

フ、
190(ママ)ところが重八はどうしとるちやるか(ある時か重八ハとふしとるちやるふきやア)

語つていた浄瑠璃を冷やかされた「久米蔵」が言つたセリフ、

223せからしかばつてん、金の入つとるばん(へせからかひばつてん金の入とるばん)

或る女性の悪口を「久米蔵」と「重八」が、
342ム、なにかア、あのおけさ後家が、あれならそう

道具どんが下に付いとるうごたる様子だア(ム、なにかアあのおけさ後家かあれならそふぢやるふ鼻ぼ

んで鳩むねはね尻あひる足えすか道具どんか下に付とるふごたる様子だア)

342エ、お前さん達ア、知りはずに、臍より上に付いとりまつするばん(エツウお前さん達の知り

ハせず臍の上に付とりまつするばん)

『伊勢道中不案内記』において、「状態継続態」は必ず「——とる」の形で現れると言ひ難いにせよ、以上の様な例を参照するならば、少なくとも、「——とる」の形で現れる場合は「状態継続態」を表していると考え

ても良いのではなからうか。

ところが、「動作進行態」の方となると、やや事情を異にする。現在の佐賀市近郊の方言と異なつて、『伊勢道中不案内記』においては、「動作進行態」が期待される場面であっても、以下の例に示す様に必ず「——おる」が現れ、「——よる」の形は出現しないのである。

例えば、『伊勢道中不案内記』においては、比較的、格式ばつた物言をする「愚津郎兵衛」でさえ、次の様な言い方をする場面がある。

禁止されている賭博の音を聞き付けて、「愚津郎兵衛」が言つたセリフ、

90ム、船中の慰みをやりをるか、船中丈はゆるすく(ム、船中の慰をやりをるか船中ハゆるすく)

更に、自分も賭博に参加し、いきなり当たつた「愚津郎兵衛」が、

91何に拙者がとに當りをつたか、面白いく(何拙者かとに當りおつたか面白ひく)

「愚津郎兵衛」の家来ともなると、以下に示す如く、佐賀方言が丸出しとなる。

「愚津郎兵衛」が菓子売りの言葉に腹を立て、刀に手を掛けたため、仰天した菓子売りが釣を返さず逃げる。

ために、菓子の代金の釣を取り損なつた「銀作」が、

191つり取らうとしをる所に、お前のやけござつたけえに見ござい取りそこなアました(つりとりふて、し

おる処ニお前のやけござつたけへに見ございとりそこなアましてござる)

「夜雨」の素晴らしさで有名な滋賀の「唐崎」に來た一行の内、「重八」は、

270咄シアなか、あいが唐崎の松ちやらうな、唐崎の松なればア上にバツと雨の降いをる筈ないどん(咄ア

なかあれか唐崎の松ちやらふなア唐崎の松なればハ上にはつと雨の降りおる筈ないどん)

そして、この様に佐賀方言を丸出しにしながら、「——よる」の形を用いる事がなく、「——おる」の形だけを使用しているのである。この傾向は、『伊勢道中不案内記』全編に徹底して行われているのであつて、「愚津郎兵衛」を始めとして、少なくとも佐賀方言を話す者は全

て「——おる」を用いていて例外はない。

以上の様に、徹底的に「——おる」のみが用いられているという事になるとすると、逆に或は、何らかの作為的所作(例えば、「——よる」を表記する事が出来なかつた等という理由のため)によるものかとも疑われるのであるが、一方で、『伊勢道中不案内記』には、佐賀方言の話し手以外の人物で「——よる」を用いる場面があるのである。

例えば、「黒崎」の宿引が、

5もう追付七つで御座りまつせう、小倉まで行きよんなさしたら、晩の五つになりまつせう、どうぞ

(5ページに続く)

- 1983 a, 徳之島の方言(3) ——徳之島町亀徳方言の実態——, 「鹿児島大学文科報告」19
- 1983 b, 琉球先島方言のアクセント体系・再考, 「鹿児島大学南方海域研究センター紀要」4の1
- 1984, 沖縄今帰仁方言のアクセント体系, 「文献探究」14
- 1985 a, ゴンザのアクセント・私考, 「文献探究」15
- 1985 b, 今帰仁方言のアクセント体系・追考, 「沖縄文化研究」11
- 1985 c, 喜界島方言のアクセント, 「鹿児島大学文科報告」21
- 1985 d, 奄美大島中部方言のアクセント体系・再考, 「鹿児島大学南方海域研究センター紀要」6の1
- 1986 a, ゴンザのアクセント・私考 続, 「文献探究」17
- 1986 b, 与論島方言のアクセント体系, 「鹿児島大学文科報告」22
- 1987 a, 沖永良部島方言のアクセント体系, 「鹿児島大学南方海域研究センター紀要」7の1
- 服部四郎, 1973, アクセント素とは何か?そしてその弁別的特徴とは?——日本語の“高さアクセント”は単語アクセントの一種であって, “調素”の単なる連続にあらず——, 「言語の科学」4
- 早田輝洋, 1977, 生成アクセント論, 「岩波講座日本語」5所収

40ページより続く

私方にお泊りなさんせ、近頃造作をしよりまして、随分奇麗にして居ります(もふ追付七つでござりましよふ小倉送行がなさんしたら五つ過二成よりましよふどふぞ私方に御留りなさんせ近比造作を仕よりまして随分奇麗に致しております)

或は、旅の「禅僧」が旅の事情を尋ねられて、ハイ、拙僧は毛澤山武蔵寺幸好開禪師の會下に居りました、ちとした色事で暫く出國致しよります(ハイ拙僧ハ毛澤山武蔵寺臭穴和尚の會下におりましたかちとした色事の訳で暫く出國致しよります)

しかも、「——よる」を用いている人物は、「伊勢道中不案内記」においては、全て筑前出身の者ばかりである(「禅僧」が筑前の出身である事は、「愚津郎兵衛」が「禅僧」の国元を尋ねる所で判明する。又、「黒崎」については言を要しまい)。

つまり、「伊勢道中不案内記」作者は、「——よる」を佐賀方言の話し手に使わせる事が出来なかつたので、「——おる」だけを使わせたといいのではなく、両者を選択したうえで、佐賀方言の話し手には「——おる」を使わせ、筑前の方言の話し手には「——よる」を使わせたといい事になるのではなからうか。そして、「伊勢道中不案内記」に反映する佐賀方言が佐賀市近郊の方言であるとするならば、現在の佐賀方言における、東部の相違(つまり、東部では「ヨル」・「トル」、西部では「オル」・「トル」の対立)は、必ずしも幕末期にまで遡る事は出来ず、かつては佐賀東部においても「オル」と「トル」の対立によつて「動作進行態」と「状態継続態」が行われていたのではなかつたのであろうか。そして、「オル」・「トル」の対立から「ヨル」・「トル」の対立への変化には、筑前(例えば、福岡市とか久留米市)の影響があつたと考える事が出来る様に思われるのであるがどうか(尚、参考迄に付け加えておくと、案間坊暮成の作品においても「オル」・「トル」の対立である)。

九州大学大学院博士課程